

平成25年度全国学力・学習状況調査 愛知県全体の傾向

1 教科に関する調査の全体傾向

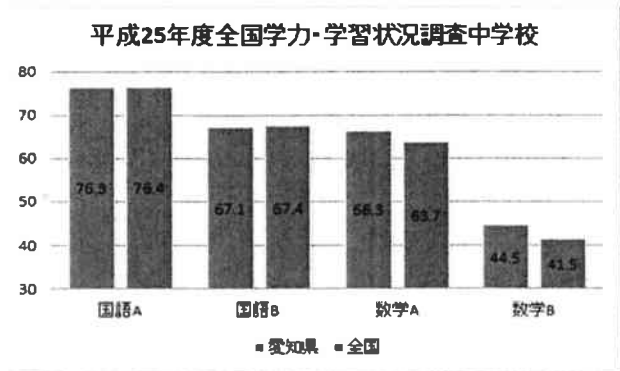
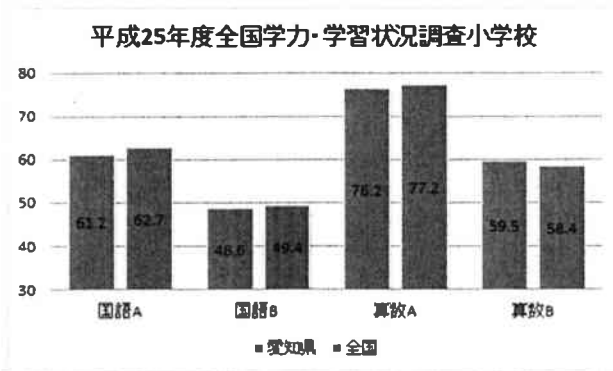
(1) 平成25年度の結果（悉皆調査）

調査区分	平均正答率 (%)	
	小学校	中学校
国語A (知識)	県 61.2 国 (62.7)	76.3 (76.4)
国語B (活用)	48.6 (49.4)	67.1 (67.4)
算数・数学A (知識)	76.2 (77.2)	66.3 (63.7)
算数・数学B (活用)	59.5 (58.4)	44.5 (41.5)

※全国は公立学校の平均正答率

小学校国語B、算数B、中学校数学Bは、過去6回の調査の中で特に平均正答率が低く、単純に平均正答率のみで経年比較することはできない。これは今回の調査が過去に課題のあった問題が出題されていることが原因と考えられる。そこで、主に全国（公立）との比較で県全体の傾向を分析した。

全国の平均正答率との比較において、小学校では、国語、算数ともにA問題で全国をやや下回った。中学校では、国語は全国と同程度で、数学は全国を上回った。



(2) 調査区分ごとに見た傾向（全国を基準とした比較）

平成19年度



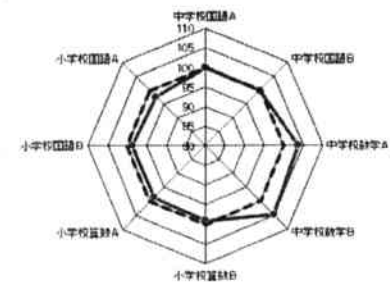
平成20年度



平成21年度



平成22年度



平成24年度



平成25年度

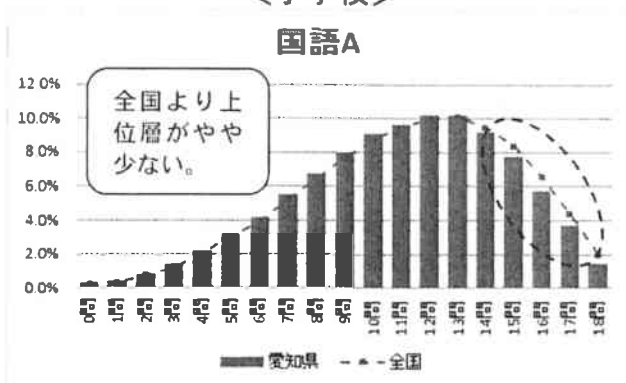


※H22、24年度は抽出調査のため平均正答率の信頼区間の中間値で表している。

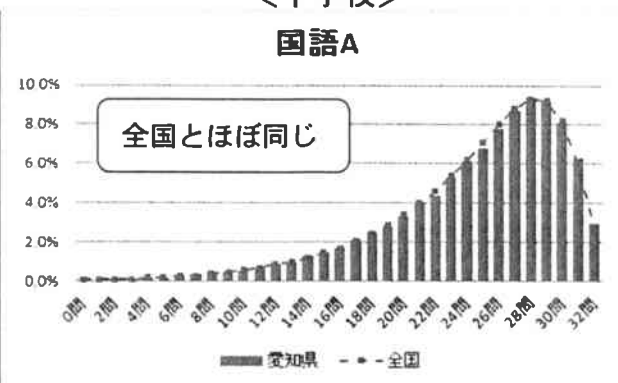
調査開始以来、全国との比較において小学校よりも中学校が高い傾向が続いている。

(3) 調査区分ごとの結果の分布（正答数別の児童・生徒数の割合）

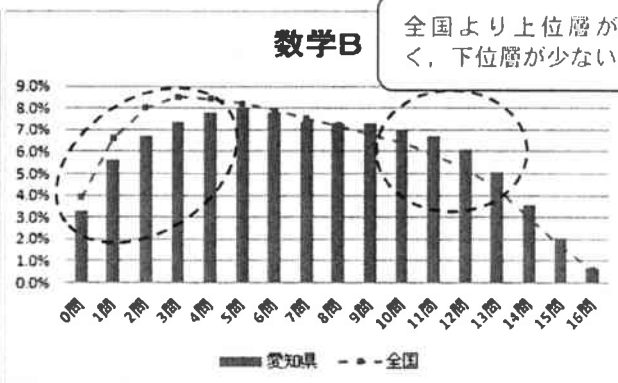
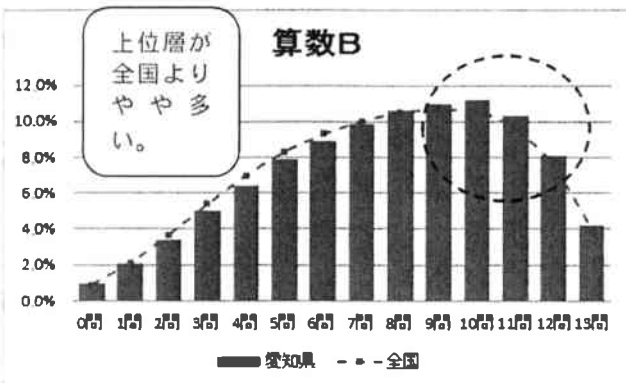
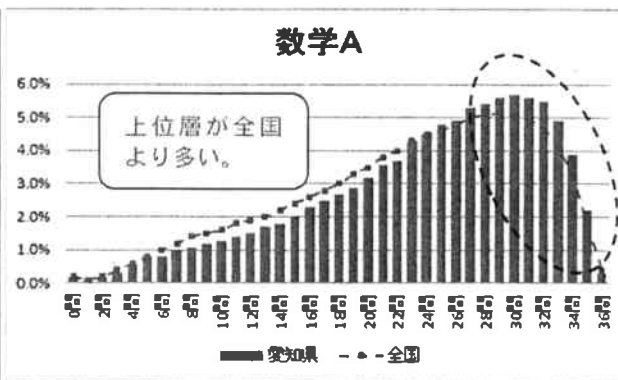
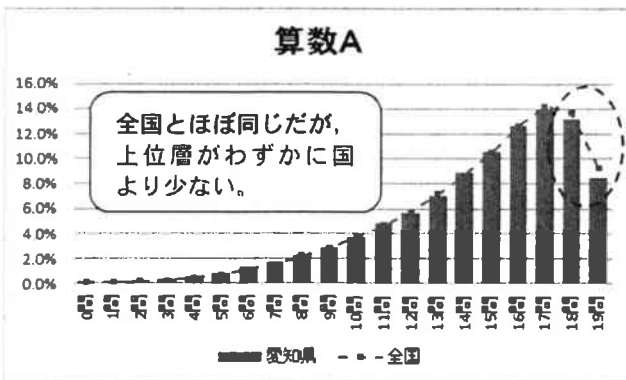
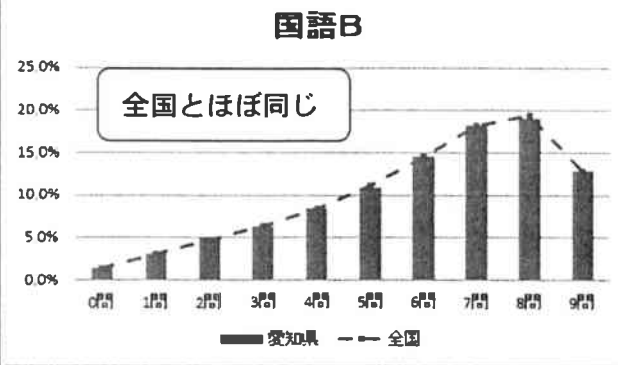
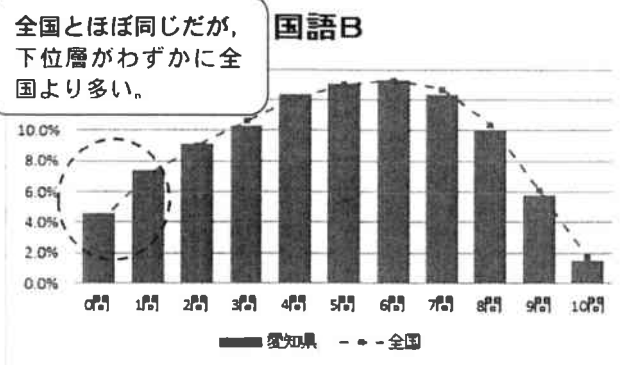
<小学校>



<中学校>



全国とほぼ同じだが、
下位層がわずかに全
国より多い。



平均正答率が全国を上回った小学校算数B，中学校数学A，Bでは，上位層の割合が全国に比べ多くなっている。国語については，小，中ともに，A問題でもB問題でも結果の分布は全国とほぼ同じ傾向を示している。

平均正答率が45%を割った中学校数学Bでは，他の調査区分に比べ低正答率の割合が高い。

(4) 調査結果から明らかになった特徴

校種	教科	平均正答率から見た特徴 (○良い傾向 ・課題)	改善の方向性
小学校	国語	全国比 ○B問題の「読むことに」に関する設問が、平成24年度に続き、全国の平均正答率を超えた。 ・「漢字の読み書き」については、平成20年度調査に比べれば全国との差が縮まっているが、本年度も全国を下回った。	☆日常で使う語彙を豊富にし、言葉の意味を考えながら正しく使う指導を心がけたい。 ☆例文を引用したり、参考にしたりしながら読み手に伝わりやすく書く指導を工夫する。
		低正答率の問題 ・目的や意図に応じて、必要な内容を適切に引用して書いたり、複数の内容を関係付けながら自分の考えを具体的に書いたりすることに課題がある。 ・推薦文を比べて読み、推薦する対象や理由を捉えることに課題がある。	
	算数	全国比 ○平成19年度調査以来6年ぶりに、B問題で、領域別、解答形式別の平均正答率が全項目全国を上回った。 ・A問題の「数と計算」の平均正答率が3回連続で全国を下回り差が広がっている。第5学年の内容は全国を上回り、第4学年以下の内容が全国を下回った。	☆新出の内容を学習する際、既習内容を十分に理解できているかを確認して授業を進めたい。 ☆二(三)者択一の理由を問う問題については、二(三)者それぞれの根拠を数や式、言葉などを用いて説明した上で、結論を述べる習慣を身に付けさせたい。
		低正答率の問題 ・記述式の問題の無回答率が過去の調査に比べ、高くなる傾向が見られ、できる児童とできない児童の差が生じている。 ・数量関係や量と測定の問題において、場面の状況に基づいて式を読んだり、単位量あたりの大きさを求める除法の式の意味を理解したりすることに課題がある。	
中学校	国語	全国比 ○3年前の6年生の時と比較すると、A問題の「書くこと」「言語事項」、B問題の「言語事項」で、平均正答率の全国との差が1.5ポイント以上改善した。 ○無回答率は、依然として全国に比べ低い。 ・語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うこと。	☆慣用句や普段あまり使わない言い回しにふれる体験を増やし、授業で使う場を設ける。 ☆文章を読んで、考えたことを書く際、その根拠として本文を引用し、より分かりやすく伝える方法を考えさせる。
		低正答率の問題 ・読み取ったことを基に考えたり書いたりすることに課題が見られた。 ・示された条件を網羅して答えたり、文章や資料を引用して答えたりする問題で課題が見られた。	
	数学	全国比 ○調査開始以来、A問題では、領域・評価の観点別、解答形式別のすべてにおいて、平均正答率が、全国を上回っている。 ・B問題では、本年度初めて「図形」領域で全国を下回った。	☆図形の性質を利用して証明の方針を立て、その方針に従って証明する場面で、生徒が互いに評価し合い、書き方を工夫する活動を取り入れる。
		低正答率の問題 ・記述式の問題7問中6問が平均正答率が50%未満で無回答率が20%を超えている。 「図形の性質や事象を文字式で表すこと」 「事象や事柄が成り立つ理由・問題解決の方法等を数学的に説明すること」 「一次関数等の数量関係や法則を表や式に表したり、その特徴を読みとったりすること」 「相対度数の意味を理解すること」	☆小学校段階から事象を数学的に読みとったり表したりして、問題解決の道筋を説明することに慣れさせたい。

上記に加え、当該学年以前に学習した内容や、問題文が要求している通りに回答することにも課題が見られた。

2 質問紙調査の全体傾向

(1) 児童生徒質問紙より

	主な傾向	改善の方向性
学習への関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> 国語や算数の重要性はよく理解している反面、「国語や算数の勉強は好きですか」に対する回答は低い。経年比較では、少しずつ改善の兆しが見られる。 英語を学び始めた時期は、全国に比べ早い傾向がある割に、英語や国際理解に関する項目の肯定的な回答が全国を下回っている。 約5%の小学生と約9%の中学生が、「授業中分からないことがあってもそのままにしておく」と回答した。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き関心・意欲を高める指導を続けていきたい。 コミュニケーション活動の楽しさを味わわせる指導が望まれる。 児童・生徒の理解の程度を捉えて授業を進めたい。
道徳性	<ul style="list-style-type: none"> 道徳的に大切なことは理解しているが、人前で行動したり発言したりすることに苦手意識をもっている児童が多い。中学生ではこの傾向がさらに強くなる。 全国に比べ地域の行事に参加する児童が多い反面、近所の人に挨拶をする児童生徒は全国に比べ少ない。 小学校では、学校行事に参加する保護者が多い状況が明らかになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 道徳に関する内容は、肯定的な回答をしていない児童生徒に焦点を当てた指導にも心がける。 教育への関心の高さを生かし、家庭と学校、地域が一体となって子どもを育てる環境づくりが望まれる。
生活環境・習慣	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習では、これまでの調査同様、宿題をしっかりと行うことができる反面、予習や復習を行う児童生徒の割合は少ない。 教科に関する調査の平均正答率と家庭学習の時間は強い相関がある。30分以上家庭学習をする児童が全国より少ない。また、2時間以上家庭学習をする中学生が全国よりも多いものの全体の4割程度である。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が進んで学習できるよう授業改善を行い、授業で育んだ学ぶ意欲を家庭学習につなげるよう教師間及び家庭との共通理解を図っていきたい。

(2) 学校質問紙より

	主な傾向	改善の方向性
教科指導	<ul style="list-style-type: none"> 本県では、漢字の読み書きや計算を重視した指導や国語の指導においては書く指導を多く行っている。これらは、教科に関する調査県全体の課題と重なっており、その成果がなかなか結果に結びついていない。 補充的、発展的な学習、実生活との関連を図った授業の実施状況が低い。 少人数指導については、小・中学校ともに算数・数学においてチームティーチング(TT)を実施している学校の割合が全国より高い。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習内容の定着度合いを捉えた指導の工夫が必要。 国の報告では、小学生と中学生では、習熟度別の少人数指導とTTを使い分けることで成果が上がることで指摘されており、中学校数学の低正答率層への対応には指導形態の工夫が必要。
学校経営	<ul style="list-style-type: none"> 本県の小・中学校は、HPを更新して学校の情報を地域や保護者に広めるよう努力している。その成果として、PTAや地域の方が学校の諸活動にボランティアとしてよく参加してくれる状況となっている。 小・中とともに近隣の学校間で連携した取組が少ない状況である。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も地域や保護者に学校の取組について理解してもらえるよう情報提供に努めたい。 9年間を見通して指導体制を中学校区ごとに確立し、接続における問題の解決を解消したい。

学力向上	主な傾向	改善の方向性
	<ul style="list-style-type: none"> 学級やグループで話し合う活動，児童・生徒の発言や活動の時間を確保すること，授業の冒頭で目標を生徒に示す活動を行っている学校の割合が高い。 インターネットやコンピュータの授業での活用，学力調査の結果の活用については，全国値を下回っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 普段の児童生徒の様子と併せて，客観的なデータからも児童生徒の実態を捉え，家庭の協力を得て児童生徒の実態に合った授業改善を図っていききたい。

(3) 教科に関する調査と質問紙調査の比較より

- 学校質問紙よりも児童生徒質問紙の結果の方が，教科に関する調査の平均正答率との相関が強い。
- 学校質問紙と児童生徒質問紙調査の結果と比較すると，指導に関する質問に対しては，教師と児童生徒の結果にやや差が見られる。
→25年度調査において，この差が小さい都道府県は，教科に関する調査で好成績を上げている。教師の取組が児童生徒に確実に伝わるよう指導法を工夫したい。

※ 質問紙調査の分析と取扱いについて

右の表は「発言や発表についての質問紙調査」の結果の一部である。上段は小学校質問紙，下段は児童質問紙の「当てはまる」「まあまあ当てはまる」と回答した割合の合計で，本県と成績上位県，全国（公立）の結果をまとめたものである。

質問内容	地域	肯定的な回答(%)
児童の発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか	愛知県	96.9
	成績上位県	97.5
	国(公立)	97.3
普段の授業では，自分の考えを発表する機会が与えられていると思いますか	愛知県	79.6
	成績上位県	83.9
	国(公立)	81.5

学校質問紙では，本県も成績上位県もほぼ同程度の回答の状況であるが，児童の回答は，成績上位県では，本県より4.3%上回っている。平均正答率を比較すると5%～7%程度高い結果となっている。

国は，「児童生徒の回答の状況の方が平均正答率への影響が大きい」と分析している。各市町村及び学校においては，自校の教師の捉えと児童生徒の捉えの差を考慮した分析をし，対策を練ってもらいたい。

※ 「平均正答率との相関関係」

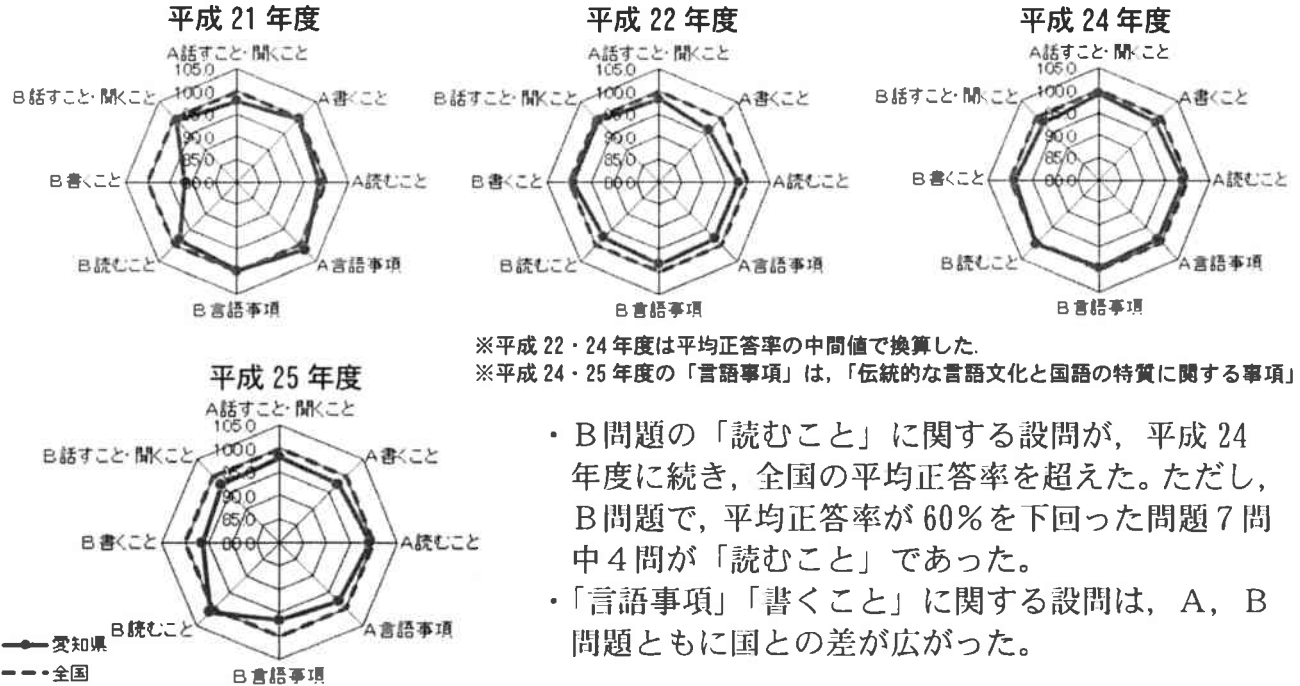
平均正答率と質問紙調査の2つの変数間の関係の程度を1つの数値で表す相関係数により判断した。相関係数は-1～+1までの範囲の値をとり，+1に近いほど正の相関が強いことを表す。

学校質問紙調査の結果と正答率との関係については，児童生徒の質問紙調査の結果と正答率の関係に比べ相関関係が表れにくい傾向があり，データから読み取れる内容と実際の状況を照らし合わせて考察した。

3 国語の傾向と改善の方策

(1) 小学校国語の傾向

ア 領域・評価観点・解答形式別で見た傾向（全国を基準とした比較）



全国の平均正答率との差 (%)		平成 21 年度		平成 22 年度		平成 24 年度		平成 25 年度	
		A 知識	B 活用	A 知識	B 活用	A 知識	B 活用	A 知識	B 活用
教科全体の平均正答率		0.5	-0.8					-1.5	-0.8
領域等	話すこと・聞くこと	-1.4	-0.5	-1.4	-0.6	-0.6	-1.3	-0.8	-1.7
	書くこと	-0.3	-1.2	-2.6	-0.7	-1.0	-0.4	-1.3	-1.6
	読むこと	-1.0	-1.0	-1.5	-1.8	-0.9	0.2	-0.5	0.4
	言語事項	1.0	-0.1	-1.8	-1.3	-1.0	-0.3	-1.4	-2.2
評価の観点	① 国語への関心・意欲・態度	-1.4	-0.4	-1.6	-1.3	-1.4	0.2	-1.3	-1.2
	② 話す・聞く能力	-1.4	-0.5	-1.4	-0.6	-0.6	-1.3	-0.8	-1.7
	③ 書く能力	-0.3	-1.2	-2.6	-0.7	-1.0	-0.4	-1.3	-1.6
	④ 読む能力	-1.0	-1.0	-1.5	-1.8	-0.9	0.2	-0.5	0.4
	⑤ 言語についての知識・理解・技能	1.0	-0.1	-1.8	-1.3	-1.0	-0.3	-1.4	-2.2
問題形式	選択式	-0.3	-2.3	-1.8	-0.8	-0.6	-1.0	-0.9	-1.0
	短答式	0.9	-0.4	-1.9	-0.7	-1.0	0.5	-1.8	-0.5
	記述式	-1.4	-0.4		-1.6		0.2	-1.3	-1.2

イ 無回答率から見た傾向（平均正答率が 60% 未満で、無回答率が 10% 以上の設問） (%)

設問番号	観点	形式	平均正答率	無回答率	設問番号	観点	形式	平均正答率	無回答率
A 1 二 (3)	⑤	短答	49.6	32.5	A 3 一	⑤	短答	34.8	20.9
B 3 一ウ	④	短答	45.1	29.6	A 4 ウ	①③	記述	43.6	20.5
B 3 一イ	④	短答	45.8	28.3	B 2 二	③	短答	24.7	15.1
A 7	②⑤	選択	42.4	23.1	B 3 一ア	④	短答	49.7	15.0
B 2 三	①③	記述	16.7	22.1					

- ・ 「⑤言語事項」, 「④読む能力」に関する問題の無回答率が特に高い。
- ・ 記述式で答える設問 3 問中 2 問は、書く能力に関する設問で平均正答率が 60% 未満で、無回答率が 20% を超えている。

※ マークは報告書、授業アイデア例の参照ページ
 ⑦は「平成25年度 全国学力・学習状況調査 報告書」
 ⑧は「授業アイデア例」

ウ 主な課題と指導改善の方向性
 (ア) 愛知県と全国の正答率の差から見た課題

	調査結果における主な課題	改善の方向性
書くこと	<ul style="list-style-type: none"> ○ 目的や意図に応じ、必要な内容を適切に引用して書いたり、複数の内容を関係付けながら自分の考えを具体的に書いたりすること。 (例) <ul style="list-style-type: none"> ・【ずかんの一部】の中から花火師の苦勞が具体的に書かれている内容を引用して書く。 B②二 (県24.7/国26.2) ・複数の内容を関係付けた上で、自分の考えを具体的に書く。 B②三 (16.7/17.8) 	<ul style="list-style-type: none"> ・引用の仕方が、テーマや見出しなどに応じたものになっているか、引用と書いた文全体のバランスがとれているかという点に留意して指導する。 ・一つ一つの事実に対する自分の考えをもち、編集の目的や意図に応じた自分の考えの中心を明確にしながら一定の条件に合わせて書くように指導する。 ・文章の要点に気をつけて読み、要約する学習、それに対する自分の考えを書く活動を積み重ねていく。 ⑧小国報p59～ H25小⑦p11～
話すこと・聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話し手の意図を捉えながら聞き、適切に助言をすること。 (例) B①二 (46.3/48.5) ・6年生の助言の仕方の説明として適切なものをそれぞれ選択する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見を聞いて助言する際、自分の考えと比べながら聞くことを重視し、共通点や相違点、関連して考えたことなどを整理し、自分の考えをまとめる指導を重視する。 ⑧小国報p53 H25小⑦p9
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文の定義を理解し、文中の主語と述語の関係に注意すること。 (例) A③一 (34.8/36.5) ・文のはじめの5文字を丸で囲む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第1, 2学年で定着しておくべき指導事項である。文の定義や文・文章の構成について指導の積み重ねが必要である。 ⑧小国報p30～

○ 漢字の読み書きにおける本県の傾向

20年度		21年度		22年度		24年度		25年度	
本県の正答率		本県の正答率		本県の正答率		本県の正答率		本県の正答率	
・保護する	97.5%	・混雑する	92.8%	・建築する	86.3%	・慣れる	95.1%	・券	98.4%
・承知する	89.1%	・移る	90.6%	・独立	90.1%	・目次	94.2%	・子孫	79.0%
・勢いよく	72.1%	・採集する	75.5%	・許す	94.3%	・清潔	95.2%	・採集する	62.7%
・なげる	79.8%	・びょういん	72.5%	・いしや	79.8%	・ひさしぶり	77.2%	・やく	71.5%
・よぼうする	60.0%	・さんせい	79.9%	・たいよう	83.3%	・ぎじゅつ	68.5%	・ていしや	41.7%
・おうふくする	57.3%	・はこぶ	76.3%	・ぬの	89.8%	・へんか	88.3%	・もうける	49.6%
県正答率平均	76.0%	県正答率平均	81.3%	県正答率平均	86.4%	県正答率平均	87.3%	県正答率平均	67.2%
全国正答率平均	78.9%	全国正答率平均	83.6%	全国正答率平均	89.0%	全国正答率平均	88.8%	全国正答率平均	69.0%
差	-2.9	差	-2.3	差	-2.6	差	-1.5	差	-1.8

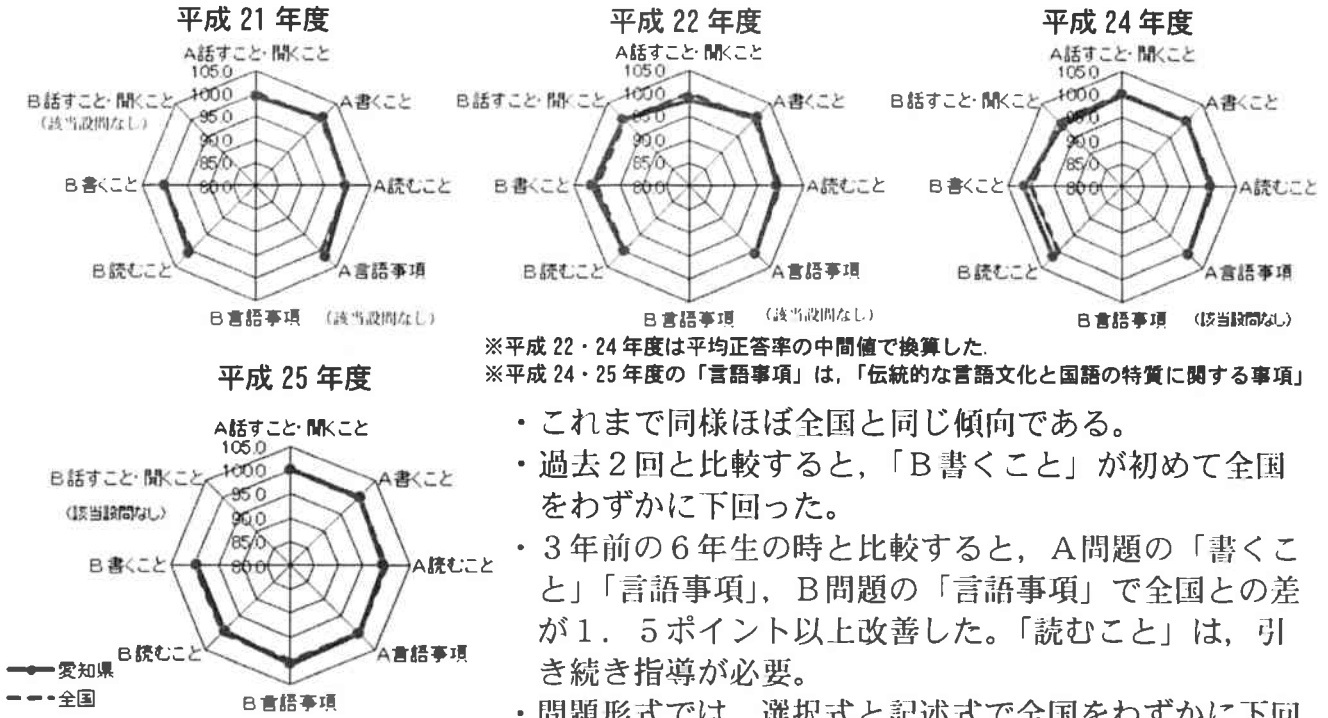
漢字の読み書きについては、平成20年度調査に比べれば全国との差が縮まっているが、本年度も全国を下回った。児童にとって使用頻度が低い漢字ほど正答率が低い傾向がある。日常で使う語彙を豊富にし、言葉の意味を考えながら正しく使う指導を心がけたい。

(イ) 全国的に平均正答率の低い設問から見た課題

調査結果における主な課題	改善の方向性
<p>話すこと・聞くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○スピーチの表現を工夫すること。 A⑦ ◆過去の関連問題…H21A⑤ <p>書くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○目的に応じて資料を読み、全体から分かることを書くこと。 A④ ◆過去の関連問題…H20A⑦, H20B③二 <p>4読むこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○推薦文を比べて読み、推薦する対象や理由を捉えること B③一イウ 	<ul style="list-style-type: none"> ・話の構成や表現方法を工夫する際、8つの表現技法を取り入れて作った下書きやスピーチについて、その効果について相互評価をする。 ⑧小国報p46～ H23小⑦p1～ ・資料に表された情報を正しく読み取り、必要な情報を取り出して、「…するにつれて…」 「一方が…のとき、もう一方は～だ」等のように、的確に記述できるように指導する。 ⑧小国報p36～ H24小⑦p3～ ・推薦文の実例を基に構成や表現の工夫を分析したり、推薦する内容を明確にしたりする指導を行う。 ⑧小国報p66～ H25小⑦p13～

(2) 中学校国語の傾向

ア 領域・評価観点・解答形式別で見た傾向（全国を基準とした比較）



全国の平均正答率との差 (%)		平成 22 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		小 6 時 (H22)	
		A 知識	B 活用	A 知識	B 活用	A 知識	B 活用	A 知識	B 活用
教科全体の平均正答率		0.0	-0.1			-0.1	-0.3		
領域等	話すこと・聞くこと	-1.1	0.1	-0.1	-0.8	0.0		-1.4	-0.6
	書くこと	0.7	0.7	0.0	0.9	0.2	-0.3	-2.6	-0.7
	読むこと	-0.7	-0.1	-0.4	0.9	-0.5	-0.5	-1.5	-1.8
	言語事項	0.4		0.4		0.1	0.4	-1.8	-1.3
評価の観点	① 国語への関心・意欲・態度		0.7		0.9		-0.3	-1.6	-1.3
	② 話す・聞く能力	-1.1	0.1	-0.1	-0.8	0.0		-1.4	-0.6
	③ 書く能力	0.7	0.7	0.0	0.9	0.2	-0.3	-2.6	-0.7
	④ 読む能力	-0.7	-0.1	-0.4	0.9	-0.5	-0.5	-1.5	-1.8
	⑤ 言語についての知識・理解・技能	0.4		0.4		0.1	0.4	-1.8	-1.3
問題形式	選択式	-0.3	-0.6	0.2	-0.2	-0.3	-0.5	-1.8	-0.8
	短答式	0.4	-0.1	0.1	1.0	0.4	0.5	-1.9	-0.7
	記述式		0.7		0.9		-0.3		-1.6

イ 無回答率から見た傾向（平均正答率が 60%未滿で、無回答率が 10%以上の設問） (%)

設問番号	観点	形式	平均正答率	無回答率	設問番号	観点	形式	平均正答率	無回答率
A 8-2	⑤	短答	59.5	12.8	B 2三	①③④	記述	64.6	12.0

無回答率が全国値より高いものは、全 41 問中 7 問であった。無回答率が 10% を超えた設問は、上の 2 問のみであった。